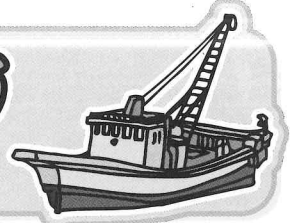




何でも魚^{うお}ツチング

No.80 『 日本に帰ってくる鮭の仲間 』



新年、明けましておめでとうござい
ます。今年もよろしくお願ひいたします。

さてさて、今年最初の何でも魚ツチン
グは、昆布巻きや新巻の材料としてお馴
染みの縁起物、鮭のお話をしたいと思ひ
ます。知つてのとおり鮭にはたくさんの
仲間がいますので、今回はもともと日本
に棲んで繁殖しているサケ科サケ属の仲
間4種をご紹介します。

まずはカラフトマス。「青ます」と言
うとピンとくるのではないでしょうか。

日本では主に北海道の川で繁殖するので、
山形沿岸ではあまり見られませんが、昨
年春の調査で定置の漁師さんから戴いた
サクラマスのサンブルの中に2匹混じつ
ていました(図1)。成長や回遊のリズ
ムがきっちりしていて、ふ化した魚のす
べては早々に海へ下り、ほとんどが2歳
で母川へ回帰します。



図1 カラフトマス(上2尾)と
サクラマスの(下3尾)幼魚

普通に「さけ」と呼んでいるのはシロ
ザケのことです。カラフトマスと同じで、
すべての魚が海に下りますが、ある程度
の大きさになるまでの数ヶ月間は川の中

で成長します。また、母川へ回帰する年
齢は、4歳を中心に2〜7歳とまちまち
です。個人(個魚?)の成長に合わせて
回帰時期を調整しています。

ベニザケは1〜2年の淡水生活の後に
海へ下り、主に3〜6歳で母川に回帰し
ます。湖を海の代わりにして一生を淡水
中で生活するものもいて、ヒメマスと呼
びます。山形にベニザケはいませんが、
ヒメマスは大鳥池などに棲んでいます。

昔に放流した魚の子孫が残っていて、年
に一回、私の釣竿をしならせる予定にな
っています。そうそう、大鳥池といえはタ
キタロウ。生物学的には巨大なイワナだと
考えられています。本当は何なのか?。

最後はサクラマス(ヤマメ)です。一
生を淡水中で過ごすもの(オスが多い。
でも山女)、海で1年過ごして大きくな
って帰ってくるもの、海へは行ったが直
ぐに帰ってくるもの、はたまた海での回
遊中にかなり西の海域まで行くもの(H
22年春に最上川で放流した標識魚が、1
年後の春、福井県敦賀市沖で捕まりまし
た)など、その生活パターンはさまざま
です。西日本に棲むサツキマス(アマゴ)
や台湾の高山地帯の川だけで生活するタ
イワンマス(別名サラオマス)は、サ
クラマスの一種(亜種)とされています。

実はこの4種、生態や遺伝子の研究か
ら、最も進化しているのがカラフトマス、
次がシロザケ、その次がベニザケ、さら
にサクラマスと続くのだそうです(図2)。
ちなみに、イワナやイトウはもともと原始
的な別の仲間に分類されるので、今回は

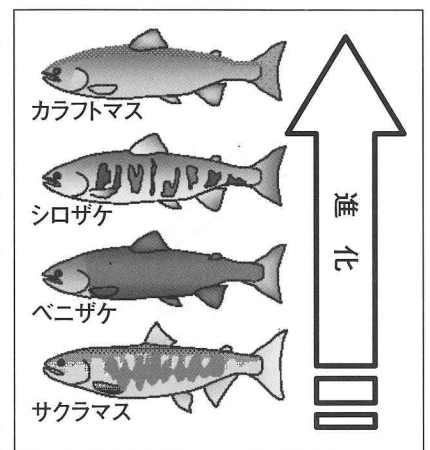


図2 本邦産サケ属4種の進化

お休みしてもらっているというわけでは
話に戻します。これらのサケ属の魚た
ちは、何でわざわざ川と海を行き来し、
川で繁殖するのでしょうか?その答えは
進化にあるようです。サケ属の祖先は、
冷たい川や湖だけで一生を過ごす冷水性
の淡水魚でした。ところが、氷河期に水
温が下がり、河口を通過して海に出られる
ようになると、川よりも餌の量がはるか
に豊富な海へと下り、生息数を増やす方
向で進化していったと考えられています。
その結果、現在では、カラフトマスやシ
ロザケが大繁殖しているのだそうです。
ただし、進化が進んだ種の方がすべての
面で優れているわけではありません。さ
まざまな生活パターンをもっているサク
ラマスの一種タイワンマスは、シロザケ
では棲むことの出来ない暑い台湾でも、
深い山の中でしっかりと生き続けている
のです。これは、新しいことにも古いこ
とにも、それぞれ優れた面があるという
魚の神様からの教訓なのかもしれません。

水産試験場浅海増殖部 研究員 野口 大悟

●積立ぷらす(漁業所得補償)で実現! 安心経営!